

サステナブルな地球・社会のための“学び” 応援マガジン

国連持続可能な開発のための教育の10年 イーエスディー・レポート

ESD レポート vol. 19 2009 夏

2009年8月28日発行

Education for Sustainable Development

NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。ずっと続く地球、社会、地域のためにすべての人が取り組む。そんな豊かで公正な未来を創造するための「価値観」と「スキル」を育む、未来創造型の「学び」です。「国連持続可能な開発のための教育の10年(ESDの10年)」が2005年からスタートし、ESD世界各国で取り組まれています。

シリーズ 学びの場をデザインする



活力の源は、島内外との交流と島への誇り

世界一のおもてなしのこころと住民自治の精神

19号の見どころ

- 島しょ部や中山間地を元気にするヒントが詰まった小さな島の学びを紹介 (p.2-3)
- 100人、100日ミュージカル、人の心をひとつにつなぐ共育コーディネーター (p.4-5)
- 新企画登場! 数字で見る社会 (p.4)、会員リレーコラム (p.6)



世界に通用する、そのまんまの暮らし

長崎県・五島列島^{おぢか}小値賀町

五島列島の北部に位置し、佐世保からフェリーで約3時間、大小17の島からなる小値賀町。この農業と漁業が主要産業の小さな島が今とっても元気。観光による地域の活性化、グリーンツーリズムにおいて、多くの注目を集めています。

昔ながらのくらしが今でも当たり前のように続いているこの島で、訪問者にそのくらしの中に入ってもらう「民泊」などの観光の取組みが経済効果と雇用を生み、国内外で高い評価を受けたことが島民に誇りをもたらしています。その源泉となったのは「そのまんまのおもてなし」。それは、むかしからずっと続く島の自然とくらしと飾らない島民一人ひとりのおもてなしのこころという島の宝物でした。

島をどうにかせんば

農業と漁業の島小値賀は、古くは遣唐使の中継地点として栄え、漁獲高日本一のアワビをはじめとした豊かな海の幸や、メロン、スイカなどの農産物に恵まれた島でした。しかし、20～30年ほど前から、日本の高度経済成長期という時代の流れ、さらに水産資源の減少による産業の衰退とともに、多くの過疎地域がそうであるように、若者が次々に島を去り、人口はピーク時の3分の1にまで減少してしまいました。そのような状況に「島をどうにかせんば」という一部の有志から始まったのが、ボランティアで行われていたホームステイプログラムの事業化、いわゆる民泊事業でした。

小値賀の民泊は「島のくらし丸ごと体験」がテーマ。食事づくりのために釣りをして

魚をさばく、野菜の収穫をする。一緒に台所に立ち、一緒につくった郷土料理を囲みながら、島の人のお話を聞く。島の話、漁の話、昔の子育ての話。だからそれぞれの民泊先で体験内容も異なります。

開始当初は7軒だった民泊先は、今では約50軒を数え、島への経済効果は数千万円以上、島外からの集客は8000人。島に収入と雇用を創出しました。さらにこの民泊事業は、農家や漁師が本業を活かしながら、ある程度副収入が得られることで、第一次産業を支えることへも貢献しています。

開始当初は経営を圧迫するのでは、と不安の声もあった旅館・民宿経営者たちも、民泊で名が売れたことで、小値賀の自然やくらしが多くるところで紹介され、結果的に訪問者の増加に伴って旅館・民宿に新

しい顧客を生むという好循環をもたらしました。

国際的に通用する「そのまんまのおもてなし」

小値賀の民泊事業が最近注目を集めている理由のひとつに、アメリカの民間教育団体「ピープル・トゥー・ピープル」による国際親善大使派遣プログラムの受け入れの成功があります。2007年、アメリカからの高校生180名を全島あげて受け入れました。たとえ海外からの訪問者であっても、飾らないそのまんまのくらしとおもてなしのこころが、「必ずすぐに帰ってきたいから荷物を置いていっていい?」という参加者の感想をもたらし、なんと2007年、2008年の2年連続で世界48カ国の中、満足度世界一の評価を得たのです。またそれ以降も、オーライニッポン大賞やグリーンツーリズム大賞など数々の受賞につながりました。

これらの民泊を展開する組織として、NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会（以下おぢかIT協会）があります。訪問者と民泊民家とのコーディネートをはじめ、「おぢかコンシェルジュ」として訪問者のあらゆる相談に対応しています。おぢかIT協会の浦西さんに小値賀の民泊の魅力を伺うと、「小値賀の民泊が何か特別なおもてなしをしているということはありません。もともと豊かな島だったからこそ、開発がそれほど進まず、島の自然やくらしが今でも残りました。島民のだらかさと飾らない気質が、訪問者を昔からの親戚や友人であるかのように迎えています。それが一番の魅力でしょう」と答えてくれました。



↑ 郷土料理づくり

でも、そのまんまの暖かいもてなしが、「こんなに親身にお世話をしてもらったのははじめて」「心の底からくつろいでゆっくりできた」という訪問者の感想を生み、多くの人が、人への感謝、島への感謝、自然への感謝への気づきを、言葉として帰り際に残してくれるといえます。

郷土への愛と自立の精神

「島をどうにかせんば」という思いが高まったひとつのきっかけとして、2004年に平成の大合併が進むなか、小値賀町は合併するかしないかを、一人ひとりの住民の投票で決めたという経緯があります。結果は「1町単独でいく」という選択。僅差での選択だったそうです。結果もさることながら、「合併するかどうか」で人口3000人の町は大きく揺れ、自分たちの町を考える大きなきっかけになったといえます。

もともと郷土愛が非常に強い土地柄であったことに加え、地域づくりのリーダー育成を目的とした「人材育成塾」が開かれていたり、「なんでんかんでん探検隊」と呼ばれる地域資源の発掘事業を進めたりと、地域の資源を活かした地域活性化には積極的に取り組んできた土地でした。

それが今、外からの訪問者が増え、さまざまな形で外からの評価が高まったことで、郷土の自然、文化、暮らしに対する誇りがさらに高まり、そういったものを大切にす



ることが島の活性化につながるという手ごたえを多くの島民が感じているようです。

風と土をつなぐもの

今、小値賀では少しずつ、Uターン者、Iターン者が増えています。取材に協力いただいた浦西さんも京都出身のOLでした。数年前訪れたときから小値賀の魅力のとりこになり、たびたびこの島を訪れた末に、2年前に移住したそうです。

Iターン者である浦西さんは、島の外のことと中のこと、両方の立場を理解できることで、島の外と中の人を結ぶことができる。外からの風と、その地の土をつなぐ役割が、島の活性化には必要だといま

す。NPOと行政との関係も良好で、そのまんまの島の良さを大切に、島を元気にしていくという同じビジョンと目的を持つことで、それぞれ立場は違っても、相談しながら一緒に前に進んでいけると話してくれました。

島がずっと続くということ

島の持続可能性に必要なものについて伺うと、「島の経済がある程度潤っていること。人口減少に歯止めをかけるためにも、島で暮らしていけるだけの経済力を持つ仕事、産業が必要です。私たちの活動の原点は実はここにあります。観光が産業として成り立ち、新たな雇用を生み、島に若者が帰ってきて子育てができる、そういう例がどんどん増えることを願っています。また、経済面だけでなく、“本当の豊かさ”を島の人たちが感じられていること。“本当の豊かさ”とは人それぞれでしょうが、それは決して経済的な豊かさだけではなく、ゆったりとした島に流れる空気だったり、農業や漁業など第一次産業に関わることであったりもすると思います。」

小値賀の島の誇りと持続可能性につながる小さな挑戦は、始まったばかり。島の外と中の人を結ぶことで、お互いに新しい価値への気づきがあり、それぞれが島への愛と誇りを生み、その交流が経済的発展にもつながる、そんなすてきな循環はこれからも、もっともっと広がりそうです。



お問い合わせ先 **NPO 法人 おぢかアイランドツーリズム協会**
長崎県北松浦郡小値賀町笛吹 2791-13 TEL : 0959-56-2646
E-MAIL : info@nozakijima.jp URL : http://nozakijima.jp/


取材協力 :

おぢかアイランドツーリズム協会 浦西玲奈さん
執筆 : ESD-J 佐々木雅一

このコーナーでは、学びの場をコーディネートしている方にお会いし、大切にしている価値、方法、壁になっていること、未来への思いなどをうかがいながら、学びの場を企てる仕事について考えていきます。第5回は、100人の一般社会人が100日で作くり上げるミュージカル「A COMMON BEAT」を社会共育の場として展開する中島康滋さんにお会いしました。

ワクワクを日本中で湧き上がらせたい ～情熱と感受性を磨く「共育の場」～

ようやく夏らしい日差しが戻った64回目の終戦記念日、「A COMMON BEAT- 感じてほしい共通の鼓動-」を観ました。それぞれ異なる言語と文化を持つ4つの大陸、人の交流が変化と不安を生み出し、やがて戦争に……。その廃墟から立ち上がった人々は何を見つけるのか。100日前に先着順で申し込みをした100人の初心者が演じる舞台とは思えない、迫りに満ちたエンタテインメントに、私はすっかり魅了されてしまいました。


 このプロジェクトを始めたきっかけはなんですか？

30歳のときに乗ったピースボート*の船上で、このミュージカルプログラムに参加したのがきっかけです。今もコモンビートで総合




演出を手がける韓朱仙(ハン・チュソン)がコーディネーターをしていたのですが、そのやり方がとても新鮮で魅力的だったんです。

彼女が教えているのは歌や踊りのスキルだけじゃない。参加者が互いを知り合い、チームワークを育み、表現力を高めあっていく、そんな場を丁寧に生み出している。チュソンの指示でみんなが動くのではなく、100人それぞれの自発的な向上心を促すことで、100人の総力としてチームができあがっていくんです。今の若者に必要なのはこれだ!と思いました。

 当時は若者の自殺者が増え、ニートという言葉が生まれた頃でしたね。

自分のエネルギーの行き場が見出せず、エネルギーを持っていることすら忘れてしまっている。冷めてる人が多数派で、「熱いことはカッコ悪い」という風潮がありますよね、今も。でも、世の中の若者はこんなものじゃない、エネルギーの行き場所を社会に向けるきっかけがないだけ、熱い人間を増やすことで、未来に希望が持てる社会につながっていくんじゃないか、そう思ったんです。熱くて何が悪い! って(笑)

 100人の参加者が他者と関係性を育んでいく「場」をつくる上で大切にしていることはなんですか？

まずはお互いをよく知り合うこと、共通項を生み出す作業ですね。例えば「宝物プレゼン」というアクティビティでは、自分の

新連載 数字で見る“社会”

12.8%

生物多様性の意味を知っている人

自然を守るための世界共通の目標を決める生物多様性条約締約国会議が、2010年10月に名古屋市で開かれ、世界各地から約190の国々が集まります。それに先がけて行われた世論調査で、生物多様性に対する認知度の低さが浮き彫りになりました。しかし一方では、自然について関心がある人が91.7%、生活がある程度制約されても環境の保全を優先すると答えた人が41.1%という結果も。いずれも、前回の調査と比べて割合が上がっており、言葉の意味は知らなくても意識は変化していることが読みとれます。

私たちの暮らしは、水・食料・木材・薬品など、生物多様性がもたらす自然の恵みに支えられています。自然のために

なることは、私たちの暮らしを豊かにします。でも、「そうは言われてもやっぱり実感しにくい」「私に関係があることには思えない」という人は少なくないでしょう。

だからこそ、生物多様性や自然を大切に思う気持ちを育み、自分自身や暮らしとの関係を学ぶ場づくりに、皆がよりいっそうの知恵と力を出しあい、自然を楽しみ、知ることを守る力に変えていく必要があるのではないのでしょうか。

(日本自然保護協会 教育普及部 芝小路晴子)

※内閣府 環境問題に関する世論調査(平成21年8月3日公表、平成21年6月調査)より



一番大切なものを持ち寄り、その宝物との出会いや想いを発表しあいます。人は好きなことを語る時、本当にいい顔をする、お互いに新たな魅力が発見できます。そうしたら人を好きになる、応援したくなる、感謝したくなる。

あと「楽しさ発見力」を磨くこと。「あと片付け」は面倒なことですが、それを楽しくやるにはどうする？ みたいな。例えばゲーム感覚を取り入れたり、歌を歌ったり。何をやってもいい雰囲気、バカバカしいことも真剣にすると楽しくなると発想やそれを包む空気感が、いいエネルギーとアイデアをどんどん生み出します。

そして真剣な「ぶつかりあい」ですね。このプロジェクトは上演がゴールなので、そのときに恥ずかしい舞台は見せられない、というプライドが根底にあります。最初はお互いの良さを褒めることから始まりますが、いずれ中途半端な出来では褒めていられなくなる。お互いが本音で言いあい、励ましあいながらより良いものをつくり上げていく力が作用します。人に指摘することにはとても勇気が要るし、責任も一緒についてくる。そんな真剣なコミュニケーションが、お互いを成長させるのです。

🎤 一番うれしかったことは何ですか？

うーん、たくさんありすぎて(笑)。でも毎回うれしく思うのは、メンバーみんなが、この場を受け継ぎたい、社会に役立てたい、と思ってくれることです。ミュージカルの裏方も毎回100人必要なんです、これはキャスト経験者しかできないんです。支えてもらって舞台に立った人たちが、次は舞台を支える人になる。そうして感謝の気持ちと経験を受け継ぎ、場を受け継いでいく。私たちは未来へ何かを受け継いでいくために存在している、そのことに気づき動ける仲間が増えていくことが何よりもうれしいです。

そういえば昨年名古屋公演では、終了後、会館を掃除している方が私を呼び止め、「こんなに施設をキレイに使ってくれた人たちは初めて！ それにスタッフのみなさんが、『ありがとうございます』って声をかけてくれて。きっと講演もすてきだったでしょうね」と話してくれました。

* ピースポート：1983年から「みんなが主役で船を出す」を合い言葉に、アジアをはじめ地球の各地を訪れる国際交流の船旅をコーディネートしているNGO。

中島 康滋 (なかじま・こうじ)

1972年名古屋市生まれ。幼少より芸術分野に興味を持ち、19歳で起業。音楽配信のITビジネスで社会的注目を浴び、携帯サービスや教育関連など多数の事業を創出する。30歳での地球一周の旅がきっかけとなり社会教育への意識が高まる。帰国後、NPO法人コモンビートを設立。多数の企業経験を活かし、経営支援やソーシャル分野での事業創出など社会企業家としてさまざまな活動を行う。

NPO法人コモンビート

<http://www.commonbeat.org/>



🎤 このプロジェクトを通して、どんな社会をつくりたいと思っていますか？

「熱い気持ちが未来をつくる、感じるチカラが日本を育てる」というのがスローガンですが、これはどんな未来かを具体的に規定していません。一人ひとりがその人なりの魅力と感受性を伸ばしてほしい、こういう人であらねばならないというものはありません。

そしてそれぞれの「こうしたい」という思いと、多様な能力や魅力を持った人が力を出し合う相互作用が社会を動かしていく、そういうものだと思います。

🎤 最後に、中島さんが今、新たに力を入れていることを教えてください。

コモンビートでは、このエネルギーを学校や地域につないでいくプロジェクトを始めています。また組織外では企業に向けた社会共育、子育て世代の母子のための感情教育に力を入れています。若者だけでなく、母親も子どもも、村人も企業人も、いろんな人々に共育的な場に触れてもらいたい。日本中でワクワクが湧きあがる状態をつくりたい、そのための火付け役ですね。

(聞き手：ESD-J 村上千里)

発見 身近な活動のESDらしさ— 50年後の未来を描く

雲仙市では、持続可能な地域づくりに向け、2007年、「雲仙市地球温暖化防止対策・ESD協議会」を立ち上げました。この協議会のメンバーは、企業やNPO、教育関係者、自治会、公募市民、そして行政からは教育委員会を含む8部局。学習と議論を重ね「温暖化防止対策地域行動計画」づくりに着手しました。

最初に行ったのが、50年後の持続可能な雲仙市のビジョンを描くこと。まずはメンバーで「50年後のCO2削減目標」について喧々諤々と議論しました。「農業と観光のまちだから、もうこれ以上削減できる余地などない」という意見もありましたが、議論を重ねた結果「60～70%削減」で合意。そしてその時の交通インフラや産業、エネルギー、人々の学びやまちづくりへの参画などの雲仙市の将来像を描き、そこへ向かっていまい何をすべきか議論しました。

社会の非持続的な諸問題に取り組むためには、社会や経済の変革を視野に入れた議論が必要です。50年先の持続的な姿を描くことで、革新的な議論や発想を促し、多様なステークホルダーの利害や意見が対立した際に新たな解決策を探るための共通の規範をつくれます。この未来像は、ESD協議会の活動の羅針盤となっています。(取材協力：長崎大学・早瀬隆司さん)

ワークショップのようす→





1 NPO × 環境 × 子ども ⇒ ソーシャルファーム

財団法人 北海道国際交流センター (HIF) 事務局長 大沼マイルストーン 22 代表 池田 誠



こんな方程式があったかなと思っている人。いえいえ、こんなことは習っていません。今年、3月に函館で行った財団法人 北海道国際交流センター (HIF) 30 周年記念シンポジウムのテーマがこれなのです。基調講演では、元環境省事務次官の炭谷茂さんが、ニート、障がい者、ホームレス、在日外国人、刑務所からの退所者などで創るソーシャルファーム構想を提起。日本 NPO センターの新田英理子さん、森づくりを続ける JUON NETWORK の鹿住貴之さん、そして児童労働を考える NGO の岩附由香さんが「地球市民が創るこれからの地域」をめぐって議論。今回のシンポジウムを通じて、これからの時代を創造するために、地球的な視点で、分野を超えて行動しようと言いました。

振り返ってみれば、これぞ ESD の視点、まさにいろいろなものがつながりあってこそ成り立つものです。1979 年から草の根国際交流を中心に活動してきた HIF が、これからの時代のキーワードのひとつとして取り組む ESD 事業。5 年ほど前から行っている ESD セミナーには、愛媛や豊中市などの事例のほか、G8 サミットに関連すること、北海道各地の事例などに関するさまざまな講師をお呼びしました。また、地域の湖をきれいにするために世界中の若者が集まり活動する大沼国際ワークキャンプを 2004 年から実施し始めました。NPO、環境、子どもたち、そして地域経済を支える人たちから、過去 6 年間で 100 名近いワークキャンパーまで、さまざまな人たちが集まり、進める環境プロジェクトです。



留学生とホストファミリーの心の交流から国境を越えてきた HIF が、今度は分野やセクターの壁を越えて活動を始めています。まさにその源と言えるエネルギーが ESD なのです。

2 一緒になら、この世界を変えられる

社団法人 ガールスカウト日本連盟 事務局次長 片岡 麻里



世界中のガールスカウトが、このことをテーマに活動しています。

これは、2015 年までに達成しようと世界のリーダーが約束したミレニアム開発目標の達成のために、私たちもともに行動しようという決意です。世界を変えるためには、一人ひとりの行動が重要であると子どもたちにも語りかけています。

日本の子どもたちが、自ら考え行動できる人となるために、私たちおとなができることはどんなことでしょうか。子どもたちに情報を正確に伝えること、子どもたちが自ら考え行動に移すことができる場を提供すること、子どもたちが行動しようとするごとにことん付きあえるおとながいること、子どもたちを信じること、などなど、できることはまだまだありそうです。



日本のガールスカウト運動は、来年 90 年を迎えようとしています。私たちの先達には、今、90 歳を越えてもお私たちを教える方々が多くいます。このたゆまない活動こそ、ESD そのものといえます。私たちの使命である、世界の人々の平和と幸福を実現することは、大変難しいことかもしれません。しかし、一人ひとりでは困難と思われることも、一緒になら、きっと可能な道が拓かれると信じています。

『心を育てるガールスカウト、よりよい明日(あした)をつくります』

私たちが ESD-J に入ったわけ

鎮守の森から ESD の輪をひろげていくために

櫻木神社 (団体正会員 7 月入会 / 千葉県野田市)

自然体験型環境教育をとおして、鎮守の森を ESD の学びの場にしたいと考えています。そのための学習と情報収集を若い神職たちと進めているところです。

鎮守の森は、まつりを通して宗教文化と生活文化が往還する多機能な空間です。そこに多くの人々が集い、憩い、そして持続可能な平和的なコミュニケーションが構築できれば、よりよい地域の発展につながるものと考えています。

まだ、スタートの位置に着いてはいませんが、鎮守の森から ESD の輪をひろげていくための意識改革を進めていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。 URL : <http://www.sakuragi.info/>



政権選択の夏、 国政への提言活動を強化

政策 PT では、2008 年度にとりまとめた「14 の政策提言」を、ESD 円卓会議や各省などに働きかけています。2009 年度は衆議院の総選挙に焦点を当て、国政への提言活動を強化してきました。各政党のマニフェストづくりに ESD 推進施策を盛り込むべく、7 月上旬に「総選挙に向けた要望書」を送付、政党と NPO の直接対話の場でも提言を行いました。また、7 月下旬には、「総選挙に向けた公開質問状」を送付、各政党のマニフェストに ESD 推進がどう盛り込まれたかなどを問いました。回答をいただいた 5 政党はすべて「持続可能な社会づくり」が重要であると認識していると書かれていますが、具体的な政策実施項目では政党ごとの違いが表れています。中には「ESD コーディネーターの養成」など、ESD-J の「14 の政策提言」にある提言が明記されているものもありました。回答は記者クラブへの配信やウェブサイトでも公表し、衆議院選挙に向けて情報発信に取り組みました。

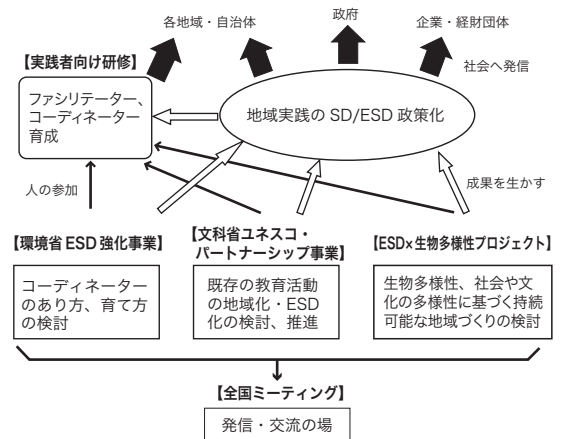


NPO と政党の政策討論会

(政策提言 PT リーダー / 岡山ユネスコ協会 池田満之)

地域 PT の重点方針：地域実践の政策化で 持続的地域づくりを推進

ESD の 10 年後半の 5 年に向けた地域 PT の活動の重点は、地域での ESD や持続可能な開発 (SD) の実践の政策化です。地域における学校や社会での実践の分析や ESD 化の作業を、現場の教員やリーダーなど担い手の方々とともに行うことや、学習コーディネーターを発掘・育成していくことを通して、どのようなしくみや政策が必要かを見定め、政府・自治体・企業への提言へとつなげていきます。(地域 PT リーダー / エコ・コミュニケーションセンター 森 良)



ESD-J の活動紹介

ESD の見える化、つながる化

今年度、研修・普及 PT では、来年度スタートする「地域の ESD 強化事業」の制度設計を環境省から受託し進めます。この事業は「14 の提言」として政府に要望していたものが実現したものです。事業の目的は二つ。一つは ESD の見える化、分野を超えた多様な ESD のアプローチを集め、その魅力、成果をわかりやすく社会へ提示します。もう一つは ESD のつながる化、地域の実践者がお互いの活動から相互に学び、地域の ESD を戦略的に協議する場を継続的につくります。

制度検討の会議は公開で行いますので、関心のある方はご参加ください。また全国 3 ~ 4 箇所地域ミーティングを行い、地域の実践者の方とも、地域の ESD 活性化につながる“しくみ”の議論を深めていきます。

その他、今年度は ESD を進めるコーディネーターの養成について検討するとともに、コーディネーターの実践講座なども企画します。コーディネータープロジェクトについては、次号詳しく紹介します。

(研修普及 PT リーダー / 日本ネイチャーゲーム協会 大島順子)

国際的なコミュニケーションの強化

国際 PT の基本的な業務の一つは、ESD を巡る世界的な動向をいち早く入手して会員の皆さんにお知らせするとともに、わが国の ESD への取組みを広く世界に向けて紹介することです。これまで、今年 3 ~ 4 月にドイツのボンで開かれた ESD の 10 年中間評価会合の結果をはじめとするさまざまな情報をお知らせしてきましたが、今後は、これから開かれる主要な国際会議や ESD 関連のジャーナルの出版計画等を含め、より幅広い情報をお届けしたいと考えています。

また、日本の ESD 関連の情報で英文化されているものは少なくありませんが、必ずしもそれらが国際的に十分知られているわけではありません。国際 PT としては、ESD-J が自ら作成したドキュメントだけでなく、他の主体が作成した多くの文献等についても、幅広く ESD-J のホームページで紹介し、原典にアクセスしやすくすることにより、日本の ESD 関連活動の英文文献に関するワンストップ・センターとしての機能を強化していく方針です。

(国際ネットワーク PT リーダー / 金沢大学 鈴木克則)

トピックス 真の社会的責任を果たすプロセス=ESD

ESD-J だより

社会的責任 (SR) の国際ガイダンス規格 ISO26000 の審議が次のステップに進もうとしています。これまでの委員会原案 (CD) の審議を経て、9月に国際規格原案 (DIS) のドラフトが発表される予定です。そして、その DIS において、これまでは直接的に記述の無かった「ESD」という表記が議論されています。

最終的な表現はまだ調整中ですが、社会的責任を組織全体へ統合するための具体的な手引きとして、ESD の記述が検討されているようです。

多様なステークホルダーとの関係の中で行動が問われる「社会的責任」は、そのプロセス自体が ESD であると思います。とくに、ISO26000 の中で重要視されている、多様なステークホルダーのエンゲージメントを実現するためには、相互の立場を理解し、共通の未来を描き、一緒に行動するための学び (= ESD) は必須戦略であると思います。

この ISO26000 の普及・活用の過程で、ESD のあり方を、企業をはじめ、社会へしっかりと提案していきたいと思えます。

来春、DIS から次の段階である最終国際規格原案 (FDIS) に進むための国際投票が予定されていますが、それに向けて、9月以降日本でもパブリックコメントが予定されています。ぜひ、みなさんも、社会的責任における ESD について、積極的に意見をインプットしていきましょう。詳細な日程等は、日本規格協会の ISO/SR 国内委員会 (ウェブ <http://iso26000.jsa.or.jp/contents/>) より公表される予定です。(ESD-J 佐々木雅一)

2009年3月～7月の活動報告

- 3月6日 環境省・東アジア地域で ESD を対象に活動する NGO の連絡会議
- 3月7日 2008 年度第 3 回 ESD-J 理事会
- 3月7日 ハンドブック拡大編集会議
- 3月12日 2008 年度第 5 回 ESD 円卓会議 出席
- 3月12日 環境省・東アジア地域で持続可能な地域づくりを対象に活動する NGO の連絡会議
- 3月31日～4月2日 ESD 世界会議、ドイツ円卓会議 出席 (ドイツ・ボン市)
- 4月15日 環境教育推進法の見直しに向けて公明党有識者ヒアリング 出席
- 4月28日 ESD 関係機関情報交換会合第 12 回 出席
- 5月20日 東洋製罐 ステークホルダーダイアログ
- 5月23日 2009 年度第 1 回 ESD-J 理事会
- 5月23日 ESD 世界会議報告会
- 6月9日 ESD レポート 19 号編集会議
- 6月10日 環境教育推進法の意見交換会
- 6月17日 第 1 回 ESD 学生ボランティア カフェ
- 6月24日 学校支援コーディネーター全国大会 参加
- 6月26-27日 中四国環境教育ミーティング 分科会 講師
- 6月28日 理事ミーティング
- 6月28日 2009 年度 ESD-J 通常総会 ESD-J 車座トーク: ESD の 10 年後半に向けて
- 6月29日 2009 年度第 1 回 ESD 円卓会議出席
- 6月29日 全国 EPO 会議 出席
- 7月8日 おおさわ学園 アントレプレナー教育 教員研修: 講演
- 7月14日 市民パワーと民主党の懇談会 参加
- 7月15日 第 2 回 ESD 学生ボランティア カフェ
- 7月27日 理事ミーティング
- 7月31日 立教大学 ESD 研究センター CSR チーム会議 出席

お役立ち情報 BOX ESD の実践に役立つ情報 あれこれ

映画「おいしいコーヒーの真実」

舞台は、コーヒーの原産国、エチオピア。コーヒーは石油に次ぐ取引量を誇る国際商品で、世界で一日約 20 億杯も飲まれる。しかし、私たちが普段コーヒーに支払う価格のうち、生産者は 1% にも満たない額しか受け取ることができない。エチオピアでは輸出収入の 67% をコーヒーが占め、1500 万人の生活を支えているが、多くの人々は最低ラインの生活を強いられ、子どもたちに十分な教育を受けさせてやることもできない。そこで映画の主人公、コーヒー生産者組合の責任者タデッサさんは、少しでもその状況を改善するため、先進国の市場で、「生産者の生活を保障し、生産地の社会開発に使われる」フェアトレード・コーヒーの販売に奔走する。彼が言うように、消費者が「フェアなトレード」を意識すれば、世界は変わる。この映画は単なる貧困だけではなく、「貿易格差」「グローバルイゼーション」「飢餓」「食糧援助」「生産者の人権」など、現在の国際社会がかかえる様々な問題を私たちに突きつけている。(フェアトレード・サマサマ 事務局長 小吹岳志)



監督: マーク・フランシス; ニック・フランシス
時間: 78 分 DVD 販売元: アップリンク



社会を考えるときに見たい映画

新メンバー紹介

5 団体 23 名の方が新たにメンバーに加わりました

- | | |
|-------|--|
| 団体正会員 | (養生庵、北九州 ESD 協議会、ソーラーエネルギー教育協会、(宗) 櫻木神社) |
| 団体準会員 | (山陽女学園中等部・高等部) |
| 個人会員 | (関東 12 名、中部 5 名、北陸 1 名、関西 2 名、九州 3 名) |

編集後記

ESD に出会ったのは大学院の授業。教育や開発といったことに関心があった自分は、「これだ!」と思い、研究テーマともしました。インタビューをきっかけに、ESD-J では学生ボランティアをさせていただきました。紙面ができあがっていく過程で ESD が持つさまざまな側面を知り、改めておもしろく深い取組みだなと思っています。今号からレイアウトが一新。新企画も始まり、自分自身が今後の展開を楽しみにしています。(川崎宣輝)

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J)

<http://www.esd-j.org/> e-mail: admin@esd-j.org

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F
TEL: 03-3797-7227 FAX: 03-6277-7554

● 会員募集中: 正会員 (10,000 円)、準会員 (3,000 円) 詳しくは HP をご覧ください ●



発行: NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 編集: ESD-J 情報共有プロジェクトチーム レイアウト: 河村 久美



この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、フードマイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。